

「蒙古風俗」

——福島安正からの聞書による19世紀最末期のモンゴル民族誌——

原 山 煌*

ま え が き

私は先に『福島安正のシベリア単騎横断に関する大衆メディアの諸相—絵図をめぐる—』（平成13・14年度科学研究費補助金特定領域研究(A)(2)「東アジアの出版文化」の一環である『『満洲国』時代を中心とする『満蒙』関係刊行物の研究』の研究成果報告書。2003年3月刊）において、上記出来事をめぐって、実に多くの出版物が刊行されていた状況をまとめた。その際の問題関心は、主として絵図をめぐるであった。江戸時代の浮世絵からの長い伝統を踏まえて最後の輝きを示していた木版印刷画、明治10年代から20年代にかけて独特の写実的表現を前面に押し出して大流行した石版画、そして新聞・雑誌の図版としてはまだ定着してはいないものの、早くも斬新なメディアとして着々と地歩を固めつつあった写真など、印刷技術の新旧がそれぞれ福島の仕事をとらえてその存在を主張したのである。まさにそれは、百花繚乱とでも言うべき盛況であった。

ここでは、上記報告書においても少し言及したことだが、絵図以外の言説に焦点をあてて、明治20年代—19世紀の最末期—における日本人のアジア認識を探る足がかりとしてみたい。衰えたりとはいえ、清朝の支配はいまだにモンゴルをおおっており、一方でロシア帝国の東方政策の一環としてもモンゴルは重視されており、大陸進出を目指す日本にとってもこの地は視野に入れておかななくてはならない重要な地域となりつつあった。従来は漢籍による知見など、いわば間接的な情報しか持ち得なかった日本にと

って、訓練された情報将校がゆっくりしたペースで歩き、思うさまその地を観察したことによってもたらされた詳細なデータは、きわめて貴重な財産となったにちがいない。

上記報告書でも述べたが、そうした軍事的な情報以外にも、福島の旅行に関する記録は一般人向けにも多種多様なかたちで発表された。この出来事自体が、そのスケールの大きさ、冒険性、国際性などの点で、当時の日本人の思考の枠組みを大きくはみ出す破天荒のニュースであったことは、当時の新聞雑誌などの熱狂的な報道からも看取できるが、ここで注目したいのは、市井の日本人に、アジアに関するなまなましい情報が直接的に突きつけられたことである。

福島のシベリア単騎旅行に大きなニュース性をいち早く見出し、ウラディオストクまで赴いて福島を迎え、事実上の独占取材を勝ちとった大阪朝日新聞記者西村時彦（天囚）による密着取材の内容が、一般人向けとしては最も精細な情報であったといえる。それは、西村が福島からの聞書の序文に「同しく函根の温泉に浴す日夕追隨する者数句君に単騎遠征の壮図を説かんことを請ふ君予が為に道途の見聞を説くこと甚だ詳なり予随聴けは録し」というように、「総て百二十回三百三十余項」にわたる膨大な内容を備えたものであった。一般向けに発表可能と判断された情報だけでもこのような規模になるのだから、陸軍当局に提出された正式の復命報告書の内容はどのように詳しいものであったのか、大いに興味を惹かれるが、それを実見する事は今となってはかなわない。

西村によるこの聞書は、『大阪朝日新聞』・『東京朝日新聞』にともども連載され、多くの一般人士の注目を集めた。『大阪朝日新聞』の

*本学文学部

場合、明治26年7月1日から同年11月6日までの4ヶ月余の長期連載となっている。同聞書は120回にわたる長期連載のあと、同じ書名で、大阪の金川書店から単行本として出版されている（明治27年6月28日発行）。ここでとりあげる「蒙古風俗」(1)－(5)は、『単騎遠征録』の195－212頁に掲載されているが、『大阪朝日新聞』に例をとれば、明治26年9月5・6・7・8・10日に原載されているものである。

モンゴルの通過に要した日数は60余日、その道程は、1892年9月24日、アルタイからモンゴルに入り、ウリヤスタイ、庫倫に至り、ここから道を北に転じ、キャフタ経由でイルクーツクに向かうというものであった。福島の日目に映じた当時のモンゴルの様子、モンゴルで福島が体験したことについては別稿で詳しく述べるが、ここでは上記聞書の中で、特に項を立ててモンゴルの風俗について論じた部分を紹介しておきたい。この部分にまとめて書かれた内容、そして「単騎遠征録」に詳細に描写されたモンゴルについてのそのほかの情報から、当時の日本人は、漢籍からの知識のほかには知る術もなかったモンゴルに関する知見を一度に、しかも大量に得ることができたわけである。

福島も意図したであろう「兵要地誌」は、本来的に対象地域の民情・習慣などを重要な関心の一つとしているものである。その意味からすれば、このときの福島のモンゴルに関する叙述は、日本人の著述としては最も早い時期のモンゴル民族誌と位置づけることが可能であり、アジアに対する日本人の認識の変遷という観点から見ても、その意義は決して小さくない。ここで、福島のモンゴルについての叙述の一部分を再録して紹介するゆえんである。

なお、単行本となったものは、比較的稀覯に属するものであったが、最近国立国会図書館で進行中の「電子図書館」事業において、「近代デジタルライブラリー」（同館所蔵の明治期刊行図書を収録した画像データベース）のなかに収録され、全巻をコンピュータの画面上で閲覧できるようになった。貴重な内容の文献であるだけに、まことに喜ばしいことといえる。

再録に当たっては、底本を金川書店発行の単行本により、原載の新聞記事をも参照しながら補訂した。原文に忠実であることにつとめたが、読者の参照の便を考慮し、新聞連載分との異同については適切と思われるほうをとった。旧仮名遣いにおける「わ」行のひらかなは、「あ」行のものに直した。明治期出版物の常として、よく現れる助詞の「は」を「ハ」としたり、万葉仮名的な用字を使ったりしているが、適宜ひらかなにあらためた。また、原文では忠実に付されている「ルビ」については、一切これを省略した。

蒙 古 風 俗

中佐蒙古に入りてより既に十三日、蒙古人と接し帳幕中に宿し稍其人情風俗に慣れけり今此に其一斑を掲げて蒙古の旅行を想像するの便に供す

○辞儀 蒙古人途上相遇へば互に「メンドー」と云ふ猶我が「御機嫌よろしう」と云ふが如し喇麻の僧と僧と、若しくは僧と知人と相遇へば互に「メンドー」と云ひつゝ、掌を相触るゝを礼と為す客幕に入りて「ノンプルワイノー」と云ひ主人又「メンドワイノー」と云ひて之を迎ふ是も亦「御機嫌よう」の意なり幕を出るに当りては一言の挨拶をも為さずして立去るを礼と為すとかや

○帳幕 幕の四壁は木をXXXの形に組み其組目に孔を穿ち孔に革紐を通して括りつけたるが一組の長さ三四尺、幾組をも継足して円形に壁の骨組を作る其壁を解けば組みたる骨は畳むことを得べく開闔自在にして移幕に便にす、さて木の骨組既に成れば其の上に柱を幾本となく結びつけて柱の末を上なる輪に集め以て天井と為す輪には幾つも穴ありて穴に柱の末を貫ぬき幾十本の柱を集めて同じく革紐もて括り既に天井の骨組成れば駱駝の毛布を壁の骨組に――張り周囲を二段或は三段に毛縄もて縛り更に大なる駝毛布をもて天井を張り天井の上を毛縄もて縦横にからげ括るなり、さて天井の大きな輪は烟筒、空気取り、明取に兼用するものなれば我が引窓の如く昼は開きて夜は閉づ、開かんとする

時は輪を覆へる毛布の綱を取りてぐるりと後辺に廻り閉ぢんとする時は又も綱を取りて前に廻り以て其開閉を自由にす入口は広さ三尺高さ四尺ばかり戸は木、暖簾は駝毛布の刺したる者、戸は夜閉ぢて栓を卸す是れ人を防ぐにはあらで犬を防ぐものなるべし如何となれば人は幕外より手をさし入れて栓をあげつ、出入自由なるを得ればなり如此にして帳幕成る

○幕内 円き幕の内の大なるは直径四間、小なるは二三間に過ぎず幕内駝毛布を敷き中央に爐あり爐に五徳ありて鉄鍋を置く湯を沸かし、茶を煎、肉を煮、焼酎を製する皆此の鍋を以す入口の正面には箱あり上に仏壇を作り喇麻の仏像を安置す仏壇の一方に、又は左右に、高さ一尺広さ一畳ばかりの台あり主人の寝台と為す爐の周囲に富めるは木の敷居を作れるも貧しきはなし貧幕に至ては寝台もなく只仏壇の下に一枚の破駝毛布あるのみ皆土の上のところがり彼の壁の骨組なる木の突出たるは乃ち物掛にして四壁に衣或は肉など吊せりとぞ

○家具 五徳、鍋、皿、茶筒、杓子、手桶、火箸、椀、小白、茶突棒、革袋の酒徳利及び磚茶入、幅六七寸長さ一尺五寸ばかり高さ四五寸の小机等は什器の重なるものにして貧富皆所持せざるなし但富者は酒徳利、磚茶入、皿などの鉄もしくは銅、真鍮等にてつくられしのみ其余は貧富皆木製にして絶えて陶器を見ず是地僻にして交通の便なく一物破るればとて之を求めんに由なく且つ遷移遊牧器物往往破れ易きより皆器の堅牢を尚べばなり去れば火箸の如きも我唐鋏刀の如く二本相離れざらむ【新聞9月5日付にも同じ図版が見えるので次頁に再録する】

左図の説明

(イ)帳幕内骨組の一部 (ロ)牛乳酒入革袋
(ハ)磚茶入革袋 (ニ)焼酎製造の図 (ホ)木椀
(ヘ)木臼 (ト)茶突棒 (チ)杓子 (リ)机
(ヌ)火箸 (ル)手桶 (ヲ)駝毛糸 (ワ)葉罐
(カ)喫烟草入 (ヨ)喫烟草入栓 (タ)小刀
(レ)燵中有艾 (ソ)婦人帽 (ツ)念仏器 (ネ)数珠
(ナ)木葉仏經 (ラ)經文 (ム)捕馬棒
○事業 帳幕七八若しくは九、十もある部落には大約羊四五百頭、馬百頭内外、牛四五十頭あ

り羊を牧する者は十四五以下の少年、馬を牧する者は壯夫にして一群二人を要し牛を牧する者は概皆老翁なり平生草野の間に放牧すといへども一日一回必ず幕辺に召集して其数を点檢す蒙古男子の事業如此に過ぎざるのみ婦女は召集点檢の際出で、馬牛羊の乳を搾り且つ衣物の破ぶれしを綴り駱駝の毛もて糸を績ぐを業と為すのみ [以上、新聞原載9月5日「蒙古風俗 (一)」]
○文字 字頭十二、変化して種々の文字と為り種々の音声言語と為る其字を書するや左より縦行に書す其音は我五十音に似たり只我アイウエオをアイウエオと云ひカキクケコをカキクケコと云ふに過ぎず博言学者人類学者等をして聞かしめば其發明する所蓋尠からざるべし文字頗る簡易なること如此しといへども民族皆游牧を是れ事とし字を識る者殆んど希に台吉猶且つ一丁字を知らず況んや其他をや只一部落毎にザンゲの職を執る者あり喇麻僧もしくは喇麻の為に教育せられし父兄を師として文字を習ひ文字を知れるよりザンゲと為りて公文の往來を為し且つ布告を読聞かせるなどするのみ (文字の事後回到詳かなり) ザンゲは猶部落長と云はんが如し

○犬 帳幕の外必ず犬あり犬の状我固有の犬と相似て其色盡く黒く眉毛は茶色なり蒙古到る處無數の犬を見る白犬は僅に三四頭に過ぎず挙動遲鈍眠るが如くなりといへど見慣れぬ人の部落に入り或は我が主人の幕に近づくを見るや尾を巻きて高く吠え且つ噛みつかんづるさま兇猛恐るべきは殆んど豺狼に過ぐ、其兇猛人を噛まんとするは洵に故あり蒙古の俗人死すれば屍を山嶺嶺上に送りて礼を終りし後は棄て、顧みず無數の犬をして群集肉を啖はしむ中佐山嶺に登る毎に屢人骨の散乱するを見しはこれが為なり故に彼の犬の人を見て吠ゆるは畜に之を怪しむのみに非ず人肉の味を知りて垂涎措かず直に其肉を啖はんとするなり中佐聞く露商の庫倫に在る者一日銃を携へて出で、獵す途中数十頭の犬に遇ふ犬群吠止まず露商恐れて河上の一樹木に攀ち登り銃を放ちて之を打ち数頭を斃せしも群犬猶退散せず樹を囲み毒牙を鳴らして高く吠ゆ如此き者一日一夜逃げんと欲するも路なく援を乞

はんに人なし進退維れ谷まり危急漸く迫りし折しも蒙古人の一隊葬を送りて河岸を過ぐるに会ひ群犬之を見て屍を得んことを思ひ其の後に隨うて山に上りければ纔に其難を逃る、を得たりきとぞ其兇獍概皆如此し犬は只其主を辨ずるのみ部落中の人といへども他人を見れば必吠ゆとぞ幕を守るには尤も妙にして行旅の危険更に甚しと云ふべし

○待客 蒙古の帳幕低くして凹地に在る者は遠く望みて其幕たるを知る可からずまして夜は燈火なきより其部落の在る所を知る可からず去れども先づ其帳幕あるを告ぐる者は犬なり犬吠ゆれば主人客あるを知り幕を出で、犬を制す客曰くノンプルワイノー主人曰くメンドワイノー遂に投宿の談判を為し其許諾を得て幕中に入る主人客の貴きを見れば仏壇の傍に赤座蒲団を敷きて之を請ず赤色は支那と同じく慶事に用ゆる者なり客坐するにも寝転ぶにも仏壇を後にす可らず必ず斜に壇下に坐すべし赤座蒲団の前に小机を置く是食卓なり客貴ければ机も亦赤し客座に就けば先づ鼻烟草を出し尋いで茶、親客には酒をも出して之を饗す

○鼻烟草 鼻烟草は蒙古人嗜好の随一にして其壺尤善美を盡して裝飾す主人先づ鼻烟草の壺を出せば客も亦壺を出し互に相分つを習と為す壺の口に栓あり栓に耳搔大の匕を附けたり匕もて烟草を盛り取りたるを左手の拇指人指との間につまみ取りて鼻を擦りつ、嗅ぐなり、たとひ烟草を好まざる者も手に烟草を受けて少時壺をながめし後返すを礼と為すこと猶我邦茶人の茶を飲みて茶碗をながむるが如しとかや

○茶 磚茶は塵に埋もれ馬矢の烟に煤けし革袋に入れて幕壁に吊せしを取出し膝の上に置きて小刀もて削り其を木の小白の中に入れ搗木大の棒もて突潰し粉末にせしを鍋に入れ馬矢もて煎じて手桶の中に移し鍋中の茶糟を杓子もてすくひ取り其跡へ羊乳牛乳を投じて沸騰せしめ煮立てば桶の中なる茶を入れて牛羊乳と和し杓子もて交返して加減を見つ、煮立てよき比に「トンプ」とて細長く底深き小桶に入れて客の前なる机の上に差出す小桶は大抵木なるも富家は銅真鍮もて作れるもあり客は皆懷中に木の平碗を携

ふれば其を取出して巾もて拭き茶を汲みて幾盃となく打飲む此の碗を拭ける巾は顔も拭き汗も拭き又不潔なる手をも拭き肉汁を盛りし碗をも拭くものなれば其垢れたるは味噌漬けの如し、さて茶と與に菓子をも出す

○菓子 牛羊の乳もて作りたる菓子をウルム、エツケと云ふ、ウルムは牛乳を鍋に入れ遠火に煮ること数時間、鍋の中の周圍堅まりし頃鍋を卸し乳を引あげて二つに打合す其大きさは我神奈川煎餅ほどにして厚さは五六分、外は乾き内は和かに甘うして旨く蒙古の食物中尤美味なるものにして富幕の多く牛羊を畜ふ者に非ざれば食するを得ずエツケは牛羊の乳を煮て小さく切り堅くほしかためし者、其堅きこと我勝栗の如く臭くして味亦甚だ美ならず中には味羊羹の如く堅くして旅行の携帯に便なるもありと云ふ

【以上、新聞原載9月6日「蒙古風俗(二)」】

○酒 蒙古の酒に三種ありアイリックは牛乳製、タルヒは羊乳製、アラヒは牛乳酒を焼酎となせしものにして、蒙古人の尤喜ぶ所なり牛乳酒羊乳酒は牛羊乳を数日間革袋の中に入れ置き屢搔廻して醗酵せしめし者、色白くして滓多く我濁酒の如し蒙古人は例の碗にて飲み飲了れば舌にて碗を舐めずり底深うして舌達せざれば手もてすくひ取りては打舐め跡は例の垢れし巾にて拭き其ま、懷中に収む焼酎は多く寒冷の時候に醸造す先づ彼の濁酒を鉄鍋の中に入れ鍋の上に底の抜けし桶やうのものを置き其上に雪又は冰を入れし鍋を置き桶の腹に孔を穿ちて一本の管をさし、蒸溜して管に伝ひ来るを壺に受く此は富幕ならでは得易からず濁酒は冷飲、焼酎は或は冷或は燗

○肉 貴賓を待つには必ず新一頭の羊を割き鮮肉を進むるを礼と為す羊肉は尤股を貴び一股肉の価支那の一錢(我十四五錢)、尋常の客にはかねて幕内に吊して蓄ふる者を用ゆ鮮肉はよけれども吊せしは馬矢の烟に煤けたり其を取りて塵をも払はで膝を俎として、唾をつけて靴を砥石として磨ぎたる小刀もて切る、膝の上の衣は巾ともなり俎ともなり馬矢の上にも坐り牛の糞をも拭きしものなれば垢染みて不潔なること言ん方なし、さて切りたる肉を湯煮て木の皿に

移し先づ客に出す富めるは皆真鍮の皿にして叮嚀にもてさんには馬矢もて皿をみがき塵を吹き去りて肉を盛る

○飲食 蒙古人は箸燧、庖丁は必ず腰にさせり主人肉を客の前に出せば客はやをら腰なる小刀を取りて左手に骨付の肉を握り右手に切りて食ふ肉堅ければ左の手を持添へて口に啣へ右手にて肉を少しづつ、切りて食ふ客は其残余の肉を主人を初め幕内の人々に分与するを礼とす去れば一罇の肉を幾人も食廻すなり終には下女などの番となりて肉は大方盡きて股の骨のみとなれば骨を割きて髓をも食ひ骨は犬に与ふ斯く我れ独り飲食するを恥ぢて烟草なり肉なり皆座中に分ちて諸共に食ふ習なれば旅人の糧を携ふる者も亦幕内に分たざる可らず去れば中佐科布多を出るに当り露商の好意にて麵包を携へ十数日の糧を為しけるが独りかくれて麵包を食ふを得ず幕に投ずる毎に幕内の人に分ち分たざるも亦我にも饅頭を与へよ我にも我にもと乞はれて言ふがまゝ、に取らせければ幾日ならずして盡きけり、さて肉を湯煮し汁は塩を投じて肉汁と為す鄭重なる馳走には汁の中に小麦の粉を入れる蒙古にて野菜穀物は夢にも見難ければ一握の小麦粉もいと貴しとなり斯る飲食は晚餐の時のみ朝は茶と冷肉、昼は茶幾盃となく飲みて腹を膨らす是れ蒙古の生活なり

○燈火 夜は仏壇に燈を点ず油は牛油羊油を煮詰めし者、燈心は駝毛の駝毛の糸なり一穗の仏燈光微にして幕内を照すに足らず爐火明滅転岑寂に堪へず寝に就んとすれば火を消し天井の覆をなす爐火まだ消えやらぬうち天井をふさげば馬矢の烟幕内に充滿し臭さ烟たさ堪ふ可らず夜間不意に來客ある時は先づ爐火を撥して火あれば其が上に馬矢を振りまくにパツと燃立ち火なければ燧をきりて乾きし馬矢を附木として焼きつくるに時を費さず

○念仏読経 夜間諄々と何やらん唱へ婦人は時に幕外に出て、幕の周囲を幾度となく廻りつゝ、唱ふるが如く歌ふが如きは念仏の声なり主人は昼さへ談笑の際常に数珠を爪繰り話の切目々々には念仏の声を絶たず棒の末に八角ばかりの箱めけるものをつけ其両辺糸に小球をつけしもの

あり念仏を唱ふる時は其棒を打振るに両傍の小球は箱と共にくるくると廻る、何と云ふものにかあらん幕毎に昼は仏壇に飾れりと云ふ蒙古人の酒を好み仏に倣して武事を修めざるは已に清朝建国の初に始まり歳を積みて益怠り柔弱俗を成し往々武器を蔵する者あれば罵りて破戒無慚と為し部落中、人の長上たる者は皆念仏読経嚙々世を終のみ復た当年剽悍勇猛の気なし而して彼等口能く念仏を唱ふるも誦経を知らざる者多く喇麻を師とし又は喇麻に教育されし父兄を師として稍文字を識る者の仏経を読むを得るも其は十の一二に過ぎず普通の仏経は蒙古語をもて之を記し其舛裁折手本の如し次は蒙古語と西藏語と対訳の経あり尤高尚なる者に至ては盡く西藏語を以て之を記す其舛裁は木の薄板又は厚紙に書して綴ぢず是直に西藏より來る者にして喇麻僧の能く之を誦するあるのみ蒙古人の此経を読み得る者殆んど稀にして二箇月間の旅行中二三人を見るに過ぎざりきとぞ [以上、新聞原載9月7日「蒙古風俗(三)」]

○就寝 蒙古人の寝に就くや衣服は脱ぎ棄て、赤條々と為り羊の裘をまとひて炉畔に打臥す幕中の名産は虱なり中佐阿爾泰駅以東幕内に宿すること十数夜、虱既に衣袴に満ち往々煩悶眠る能はず且つ天既に寒く夜半風幕隙より至り温度殆んど幕外と同じく冷氣肌に透りて夢覚むる者数なり中佐蒙古人の炉畔に熟眠するを見て思ふに蒙古人防寒防風の法蓋し自然に出る者あらん請ふ我も亦彼の為す所を学ばんと乃ち衣を脱ぎて裸と為り裘套を横に被り肩をも手足をもまとひて寝に就きけるに四肢密着して温度相通じ裘は冷氣を導かずして夜寒を防ぐことを得つ、虱は毛の上を這い廻ること自由ならざるより思の外に其責をも逃れて熟眠することを得けり彼の蒙古人が裸体の上に不導体の毛衣をまとひて熟眠するは誠に自然に出でし防寒防風の良法なりけり幕隙より吹透す風針の如きより冬は幕の駝毛布の隙間に牛糞を塗りて風を防ぐとなり仏壇の燈明既に減えて馬矢の爐火明滅とし群幕人定りて天地亦静かなる時、遠く聞ゆる犬の遠吠には行旅の腸を断たざるなく、左らぬだにものごき夜半、大風忽作り山に激して雷の如く砂塵

幕を打つ時孤客の夢を驚さざるなしとかや

○起床 天井の覆を取らぬうちは夜は明けても日は出で、も幕内暗黒。覆を取るや光線の入ると共に中に咽びし馬矢の烟、不潔なる種々の臭気忽ち天井より洩れ出で、いと心地よし朝先づ起出づる者は婦女なり先づ天井を開き尋いで爐火を撿し余燼あれば更に馬矢を投じ火滅えし時は燵をきりて火を起しつ、鍋に湯を沸かすやがて幕中の人々皆起出で油の浮ける鍋の湯を椀に酌みて口に含み口の湯を両手に受けて顔を洗ひ又も湯を椀に酌み口に含みて手を洗ひ彼の雑巾と手拭とを兼ねたる布片にて手をも顔をも拭ふ、茶出来ればエツケ或は冷肉を食して茶十数盃を飲みて朝飯と為す

○廁 さて難儀なるは両便なり固より廁なければ幕外に於てせざる可らず去れども我幕を去ること遠ければ兇犬来りて臀を噛むをもて我家が犬の保護線内に於て用を弁ぜざる可らず故に廁は即ち幕外十歩を出でず男女皆草野の上にしゃがみ広く裳を披きて人目を包むもの皆是なり、固より紙なし、中佐は我宿りし幕の犬にさへ吠えらるれば部落中の犬皆敵にして幕外一步即ち是れ敵地なり去れば其廁に上るや幕中の人其後に立ちて之を保護す蒙古穀と菜なくして便秘し輒く事を了る可らず臀後の保護者老人ならんにはさして苦しからねど十七八の娘など立ちたらん時は気の毒なりきと打笑ひぬ

○捕馬 朝は必ず牧場の群畜を召集点検す又乗馬の入用などありて捕へんとする時は捕馬棒とて棒の末に綱の輪をつけたるを携へ追掛けて輪を馬の首に引掛くるなり一騎は捕馬棒を携へ一人は龍頭を携ふ牧場に入るや馬悟りて逸す逸するも曾つて群を離れず騎者の馬は群馬中の尤健なる者疾駆して追詰め棒末の輪を引掛くるや一人は馳寄りて龍頭を掛けて牽きて帰る

○男子風俗 毎幕男子一人は必ず辮髪なるも其余は兄弟何人ありとも皆喇麻の徒弟と為り剃髪円顚なり去れども妻帯は其自由に任す概ね皆髪を蓄へず辮髪者は毛帽、剃髪者は毛帽の頂に黄布をつく、帽尾に垂れし布は皆黄色或は紅色なり衣装は冬は皆裏毛の羊裘にして或は表に浅黄の布をつけしもあり支那服に似て裳長く垂れ袖

も亦長くして広し胸は各せて右肩の傍にて鈕を用ひ帶を結ぶ先づ帶を尻の辺に結び衣裳もろともにぐっと引あげて腹と背とを膨らして囊の如くならしむ袖の長きは手袋を用ひずして寒を防ぐに足る可く其広は手の出入自在にして虱を捫ねるに便なる腹背に衣を膨らして囊の如くならしむるは虱の直に皮膚に迫るを防ぐなるべし帯には燵、小刀、嚔烟草入を附く此は男子の尤貴重する者にして貧富に応じて銀珊瑚珠玉なんどもて裝飾せり靴は支那風の布靴にして冬は牛革の靴をも用ゆとなり【以上、新聞原載9月8日「蒙古風俗（四）」】

○婦人風俗 婦人の衣裳は殆んど男子と同じきも其異なれるは肩なり双の肩には裳と色を異にせし布を縫ひつけて高く聳えしむ、其の色は多く萌黄又は赤なり帯は結ばず、裳は披けり、髪は二に分ちて三組に編みたるを肩より左右の胸に下げたるが其末には二銭銅貨ばかりの銅銭を結びたり靚装せし時は胸に垂れし双の髪を袋に入る彼の銅銭は髪を袋に入れ易からしめんとてなり袋には銀珠玉などを飾れり頭には大なる銀環を穿つ其状鉢巻の如し銀環には珊瑚珠玉なんどの裝飾を施せり鬢には牛又は羊の油をつけて薄く平たく張出し鬢挟をいくつも挟みてつぶれざらしむ去れば女の鬢は扇子をひろげたらんが如く鬢挟は扇子の要に似たり斯く双の鬢の張れる結びやうなれば仰向に寝る外は右へも左へも傾ぶかれずいと窮屈なるべし是れ既婚の婦人の風俗なるが処女は髪を編みて後に垂る、のみ其他に異なれる節なし耳には皆耳環あり荒原張幕の中に在りて馬矢の烟に煤け、垢れ果て、も湯に入らざれば一見して孰れか其男たり其女たるを知る能はず躰格は極めて強壯に見ゆとなり其容色想ふべし

○音楽 嚮導の蒙古人など馬上声高らかに歌ひつ、馬の足並に合する節いとをかし我追分節に似通ひ音調は流石に悲壮なりと云ふ彼等が祖先の勇猛は纔に俚歌の中に残れるにや游牧人種は皆音楽を好みりと聞けども斜陽芳草の下牧笛を牛背に弄ぶをだに聞かず帳中幕壁絶えて楽器を掛けしをも見ず只二閏月余の旅路のうち嘗て一帳幕に入りて粗造なる一楽器あるを見、主人

に請ふて弾じ且つ歌はしめしことありしのみ其楽器は胡弓の類にして其端に馬首を刻めりと云ふ土地相應の楽器と云はん

○家族 蒙古の俗長者を貴び所謂長幼序ある者の如きは美風と謂ふべし去れば親の子に対するも甚だ厳ならず子の親に事ふるや従順にして言葉に背くことなど希にして互に声高に叱り罵るを聞かず夫婦は支那人に比して婦人の位置高したとへば夜間婦人は寝台の上に臥し夫は寝台の下なる破駝毛布の上に寝ぬるが如きこと多し同じ帳中に生れ父子兄弟夫婦皆終身雜居なれば其情相狎れてや男女嫉妬の念薄きに似たり去れば兄弟二三人同妻の家族を見しこともありと云ふ道に蛮俗なり斯く男女一帳幕の中に雜居して帳中の事曾て憚る所なきより少年兒童など淫猥の事を解すること早く其口にする所耳を掩はまほしき事多しと也

○社交 四隣部落の相去ること甚だ遠く一部落の帳幕七八点の人は殆んど生死を同じくし苦楽を與にすること一家人の如く且つ一部落の群畜を放牧するにも毎幕代る代る看守して共有財産の如きものなれば其交情自ら親密なり彼等は游牧肉食ふの外に人間復た快樂あるを知らず快樂を知らざるが故に平原荒野の中に在りて巻帳敗幕の中に坐しつゝ熙々として世を面白う暮し復た人生懊悩の事あるを知らざる者の如し土各風を殊にして一県一郡猶且つ習慣の同じからざるが如く部落相去ること遠きより各部落皆風習を殊にし或は親切或は不親切、皆相同からざり

きと云ふ

○喇麻 喇麻は仏教の一派にして而して西藏に起りて蒙古に行はれ其由て来る所久し今や畜に宗教の事のみならず文学教育医療の事に至るまで其権皆喇麻僧の手に帰し勢威甚猖なり蒙古人蒙昧字を識らず而して独り字を識る者は喇麻僧なれば子弟の書を読まんとする者皆之に師事す茫々たる蒙古の野医薬を求めんに所なく而して喇麻は西藏の薬方に通ずるより病む者皆就て草根木皮を乞ひて之を服す其薬は皆西藏より来る者、往々効あり庫倫は蒙古第一の大都会にして露商の此に居る者男女老幼凡一百人而して一欧医なし此をもて露人も亦病めば則喇麻に請うて之を療す喇麻僧中一二人医を善する者あり草根木皮を能く疾病を治すと云ふ去れば喇麻の勢力は全蒙古に震ひて神の如く仏の如し勢力の在る所即ち弊害の伏する所にして之が為に生ずる弊竇亦一ならずとかや

其他蒙古の風俗記すべき事多し中佐の鞭影を写すに方り次第描出以て細大遺さざるべし読者先づ其大略を知りて而して後蒙古の紀行を読まば思半に過ぎん但冠婚葬祭の事、中佐の旅行中未だ一たびも見ず書中の記する所を見、土人の語る所を聞きし事なきに非ざりけるも其事実を誤らんことを恐れて語らず故に略す【以上、新聞原載9月10日「蒙古風俗（五）」】

本稿は、2003年度桃山学院大学特定個人研究費による成果であることを感謝とともに銘記する。